

日本計量生物学会 ニュースレター

1. 巻頭言「日本人の読み書き能力調査の裏話」	- 1	6. シリーズ「計量生物学の未来に向けて」	- 5
2. 第 26 回国際計量生物学会議の受賞のお知らせ	- 2	7. 2014 年度日本計量生物学会年会・学生会員発表者への旅費補助のお知らせ	- 7
3. 2014 年度日本計量生物学会賞および功労賞候補者推薦のお願い	- 2	8. 2014 年度統計関連学会連合大会のお知らせ	- 9
4. 2013 年度・2014 年度理事会議事録	- 3	9. 学会誌「計量生物学」への投稿のお誘い	- 10
5. 2013 年度計量生物セミナーの報告	- 5	10. 編集後記	- 10

1. 巻頭言「日本人の読み書き能力調査の裏話」

昨年末にある研究会で、戦後の「日本人の読み書き能力調査」に実際に携わっておられた高倉節子先生のお話を伺う機会があった。日本が第二次世界大戦の敗戦国となり、GHQ による占領下の日本民主化計画が実行に移され、教育改革の一環として漢字廃止・ローマ字化の計画があった頃の話である。日本の教育状況と日本語に対する無知と偏見から、「日本語は漢字が多いために覚えるのが難しく、識字率が上がりにくいために民主化を遅らせている」とする、ジョン・ペルゼル (John C Pelzel) という文化人類学者でもある若い将校の発案で、日本語をローマ字表記にしようとする計画があった。一方でこれは日本人のローマ字論者からの計らいがあったという説もあるようだが、調査結果から識字率が低いことを示し、ローマ字化のための合理的な裏付けを引きだそうとして実施された調査である。

調査結果からは、漢字の読み書きができない者は 2.1%にとどまり、「日本人の識字率が 100%に近い」という世界的に見ても例を見ないレベルであることが判明した。この調査は、結果として日本人の識字率の高さが示され日本語のローマ字化政策が撤回されることに寄与したことだけでなく、科学的手続きによって実施された日本での初めての大規模サンプリング調査であることで知られている。しかし、最も特筆すべきは、調査に関わった人々の全身全霊を注いだ熱い取り組みであろう。調査票作成と調査計画立案と実施の 2 つの班に大きく分けられるが、調査に携わった人々には増山元三郎、佐藤良一郎、水野坦、高木貞治、金田一春彦、など多数の戦後の日本を代表

山岡和枝 (帝京大学大学院公衆衛生学研究科)

する学者が名を連ねている。そしてこの調査の中心となったのが当時、若手研究者であった柴田武 (慶応大学柴田里程教授のお父上) と林知己夫の 2 名であり、調査票作成では、言語学者の柴田武に読み書き能力テスト (Literacy Survey) の出題が任され、調査実施では統計学者の林知己夫に被験者のサンプリングが任され、日本で初めてのランダムサンプリング調査が 1948 年 8 月に行われたのである。この若い 2 人が両輪となり、調査実施が決定されてからのわずか半年の準備期間に、柴田武は読み書き能力を測るための調査票とその評価方法を作り上げた。林知己夫は層化基準として産業比率、ラジオ保有率といった統計情報をもとに地域を層化するという新しい発想を取り入れた理論を構築した。この調査の母集団は 15 歳から 64 歳までの日本人の一般国民を対象とし、サンプリングは層別 2 段抽出法により調査地点 (270 市町村) を抽出し、各地点では米穀配給台帳から個人を等間隔で選び出し、合計 17100 人を選出した。調査は学校などの 405 の調査会場に出頭依頼し、16814 人を対象に実施された。当時の社会状況の中でのこのような空前絶後ともいえる調査は、調査後 1 年間で分析を終え報告書としてまとめられ、1951 年に東京大学出版会から出版されている。

現在のようにパソコンもない時代にやっと手回し計算機を使えるかという状況のなかで、これだけの偉業がなされたのは筆舌し難い苦勞と努力があったことはいまでもないが、残念ながら調査にまつわる苦勞話は書かれてはいない。高倉先生のお話の一例をあげると、たとえばこの市町

村の抽出にあたっては1つ1つの町村の状況を把握していた「地図の達人」ともいえる研究者の存在が大きかったそうである。部屋いっぱいの日本全国の地図と奮闘しつつ地形も含めた詳細な状況を把握しつつ検討されたそうで、その方は失明寸前であったとか、当時の苦労話からは調査に注いだ皆の情熱が伝わってくるものであった。高

倉先生ご自身も分析の1年間、平均睡眠時間が数時間というなかで奔走、報告書がまとまったあと体調を崩され、復帰まで3年間かかったそうである。

身体を壊してまでとは決していわないが、生物統計家の若い世代にも、このような情熱をもって取り組んでいかれることを望む。

2. 第26回国際計量生物学会議「平成25年度日本政府観光局(JNTO)国際会議開催貢献賞」受賞のお知らせ

丹後俊郎 (IBC2012 組織委員長)

第26回国際計量生物学会議 (IBC2012) 開催から早くも1年と3か月が過ぎましたが、このたび、IBC2012 開催に対して「平成25年度 日本政府観光局(JNTO)国際会議開催貢献賞」を受賞しました。この賞は日本政府観光局が毎年、国際会議の誘致や開催に貢献した国際会議から顕著な貢献をした会議を、日本政府観光局と有識者による審査委員会で審査し選考しているものです。IBC2012 は一般財団法人 神戸国際観光コンベンション協会から推薦されました。IBC2012 の社会貢献の一環として、少しでもその存在を広く認識していただくことにつながるものと組織委員長として判断し、賞をお受けした次第です。授賞式は12月10日(火)13:30-14:30に東京国際フォーラムでの国際ミーティング・エキスポ (IME2013) で行われました。詳細は下記をご覧ください。

<http://expo.nikkeibp.co.jp/ime/2013/award/index.html>



開催貢献賞の7団体での集合写真



IBC2012 の受賞



クリスタルの盾

3. 2014年度日本計量生物学会賞および功労賞候補者推薦のお願い

椿 広計, 松山 裕 (学会賞担当理事)

日本計量生物学会は、日本計量生物学会賞、功労賞および奨励賞の3つの賞を授与しています。この中で、日本計量生物学会賞と功労賞の受賞候補者は、会員の皆様により推薦いただき学会賞選定委員会にて受賞者を推薦し、日本計量生物学会賞受賞者は理事会の承認により、また功労賞受賞

者は理事会での協議のうえ総会の承認により決定されます。

今年度も、会員の皆様に日本計量生物学会賞および功労賞の推薦をお願いする時期となりました。自薦、他薦いずれも受け付けますので、宜しくご推薦お願い申し上げます。日本計量生物学会

賞および功労賞の対象者は以下の通りです。

日本計量生物学会賞：顕著な研究成果を発表した学会員に対する賞

功労賞：本学会への貢献が大きかった学会員に対する賞

下記の様式により日本計量生物学会賞、功労賞いずれも学会賞選定委員会宛にお送りください。受賞者の発表と表彰は5月の日本計量生物学会総会で行います。いずれの賞もニュースレターなどで受賞理由を公表いたします（推薦者は非公表です）。

推薦書の様式：A4版1枚に、日本計量生物学会賞

または功労賞推薦書と14ポイントで書き、本文は10.5ポイントで以下の内容をご記入下さい。資料の添付等は自由です。

- 1) 被推薦者氏名、所属、連絡先（住所、電話、e-mail）
- 2) 推薦理由
- 3) 推薦期日
- 4) 推薦者氏名（複数場合は全員）
- 5) 推薦者（複数場合は代表者）の所属および連絡先（住所、電話、e-mail）

推薦締め切り期日：平成26年3月31日（必着）
推薦書送付先：

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-6
能楽書林ビル5階
（財）統計情報研究開発センター内
日本計量生物学会事務局 学会賞選定委員会

4. 2013年度・2014年度理事会議事録

浜田知久馬、佐藤俊哉（庶務担当理事）

○2013年度第5回対面理事会 議事録

日時：2013年12月26日(木)17:00～18:10

会場：東京理科大学 神楽坂校舎
3号館7階 会議室

出席：大橋、和泉、大森、佐藤、寒水、高橋、
手良向、服部、浜田、松井、松山
欠席：丹後、椿、三中、森田、菅波、上坂（監事）、
山岡（監事） <委任状5通>

議題：

1. 庶務担当理事からの報告

庶務担当の浜田理事から、入退会状況と会員数が報告された。また会員名簿作成状況が報告された。EAR-BC2015についてはシンガポールで開催予定であったが、未だにアクションがなされておらず、日本開催も検討することになった。

2. 会報担当理事からの報告

会報担当の和泉理事より、ニュースレター114号の発行スケジュールと内容が報告された。

3. 編集担当理事からの報告

編集委員長の松井理事から、「計量生物学」の発行、現在の投稿状況が報告された。また、学会奨励賞の選考基準について、細則第6条の内規を補足する形で、総説、研究速報論文も対象とすることが提案されたが、原著を優先する点と依頼原稿を除外する点が確認された。

4. 会計担当理事からの報告

会計担当の高橋理事より説明がなされた。

1) 2013年度年次大会の共通経費として、応用統計学会から20万円が支払われた。

2) IBC2012の貸付金300万円が返金された。

3) 2014年度の学生会員費については特別措置として無料にし、2014年度の総会で学生会員費を恒久的に無料化することを提案することになった。

4) 2014年度の国際会費については、6,000円とすることになった。

5) 2014年度の途上国援助の送金額については、3,000USドルとすることになった。

6) 2013年度の決算の会計監査については、2014年2月3日に行うことになった。

7) IBC2014の若手会員発表者への補助金および年次大会の学生会員の発表者補助金を予算化することになった。

8) 日本計量生物学会 評議員会／理事会開催時の交通費および宿泊費の支給についての申し合わせ事項（改定案）が示された。

5. 企画担当理事からの報告

企画担当の服部理事より報告がなされた。

1) 計量生物セミナー

2013年度計量生物セミナーの開催内容と収支について報告がなされた。

テーマ：「薬物動態解析の基礎と Model-Based Drug Development」

日時：2013年12月13日(金)13:00～18:00／
12月14日(土)9:00～12:30

場所：TKP 神田ビジネスセンターANNEX（ホール4A）

2014 年度計量生物セミナーは、Gatekeeping などの多重比較をテーマとした内容で開催を検討している。

2) 年次大会

2014 年度年次大会は、2014 年 5 月 23 日(金)～24 日(土)に統計数理研究所で開催し、特別セッションとして、三中信宏氏をオーガナイザーに「ゲノム情報学・農学・生態学における統計モデリング」を企画していることが報告された。

2015 年度年次大会は、2015 年 3 月 12 日(木)、13 日(金)、14 日(土)に京都大学紫蘭会館で開催を予定している。

3) その他

年次大会のチュートリアルまたは統計関連学会連合大会のシンポジウムで、メタアナリシス関連のセッションを企画する。

統計家の行動指針に関する教育プログラムを企画する。

6. 統計関連学会連合大会のプログラム委員・運営委員の選出

プログラム委員については菅波秀規氏、運営委員については平川晃弘氏と篠崎智大氏を選出した。

7. 厚生労働省からの依頼（ワーキンググループ設置）について

大橋会長から説明がなされ、ワーキンググループの委員の選出については大橋会長に一任することになった。

8. 「統計家の行動基準」と「計量生物学会声明」について

「臨床評価」誌への掲載について承認された。

9. 「第 26 回国際計量生物学会議」関連報告

組織委員長の丹後理事の代理で、佐藤理事から、第 26 回国際計量生物学会議(IBC2012) 開催に対して「平成 25 年度 日本政府観光局(JNTO)国際会議開催貢献賞」を受賞したことが報告された。

10. その他

・今後の理事会の予定

日時：2014 年 2 月 3 日 17:30～

場所：東京理科大学

日時：2014 年 3 月 28 日 17:30～

場所：東京理科大学

○2014 年度第 1 回対面理事会 議事録

日時：2014 年 2 月 3 日(月)17:30～18:30

会場：東京理科大学 神楽坂校舎

3 号館 7 階 会議室

出席：大橋、和泉、大森、高橋、丹後、手良向、服部、浜田、松山、山岡（監事）

欠席：佐藤、菅波、寒水、椿、松井、三中、森田、上坂（監事） <委任状 6 通>

議題：

1. 編集担当理事からの報告

編集委員長の松井理事の代理で、浜田庶務理事より、「計量生物学」の発行、現在の投稿状況が報告された。

2. 会報担当理事からの報告

会報担当の和泉理事より、ニューズレター114号の発行スケジュールと内容が報告された。

3. 企画担当理事からの報告

企画担当の服部理事より報告がなされた。

1) 計量生物セミナー

2014 年度計量生物セミナーは、「仮説検定における多重性の制御」をテーマとして企画中であることが報告された。

2) 年次大会

2014 年度は 5 月 23 日(金)、24 日(土)に統計数理研究所で開催予定であり、特別セッションとして、三中信宏氏をオーガナイザーとして、「ゲノム情報学・農学・生態学における統計モデリング」を企画していることが報告された。年次大会のチュートリアルは、応用統計学会の企画による「ビッグデータと秘匿化の諸問題（仮）」で企画中であることが報告された。また、統計数理研究所に共催依頼をすることが確認された。

3) その他

年次大会のチュートリアルまたは連合大会のシンポジウムでメタアナリシス関連のセッションを企画することが報告された。

4. 学会賞担当理事からの報告

学会賞担当の松山理事より報告がなされた。日本計量生物学会賞と功労賞については、学会 HP とニューズレターに推薦のお願いを掲載したこと（今後 ML でも連絡予定）が報告された。学会賞選定委員会を立ち上げ、奨励賞についても、編集担当理事に例年通りの日程で選考をお願いすることが報告された。

5. SpringerBriefs in Statistics 日本統計学会編シリーズ

松山理事より、SpringerBriefs in Statistics 日本統計学会編シリーズについての対応の報告がなされた。

6. 会計担当理事からの報告

会計担当の高橋理事より説明がなされた。長期会費未納者について、再度の督促の上、期日までに入金が無ければ退会扱いとすることが確認された。

2013年度の決算報告の一般会計の支出の部では、年次大会運営費が地方開催等の理由により例年より高額となり、更に実績が予算額を上回っていたため、理由についての説明文書と予算の根拠を用意することとした。山岡監事から、繰越金に

5. 2013年度計量生物セミナーの報告

和泉志津恵, 菅波秀規, 手良向聡, 服部聡 (企画担当理事)

2013年12月13日(金),14日(土)の2日間、「薬物動態解析の基礎と Model-Based Drug Development」というタイトルで、オーガナイザー 菅波秀規(興和株式会社), 笠井英史(サターラ合同会社)で、以下の内容で計量生物セミナーが神田ビジネスセンターにおいて開催されました。参加者は108名でした。

・12月13日(金)

1-1) PK 解析の基礎 (Phase I を中心に)

講師: 田中潤 (株式会社ベル・メディカルソリューションズ), 猪川和朗 (広島大学)

1-2) Phase I 試験の PK 解析における統計的側面

講師: 橋本敏夫 (田辺三菱製薬株式会社)

・12月14日(土)

2-1) 母集団薬物動態解析の基礎

講師: 船渡川伊久子 (帝京大学医学部)

2-2) 医薬品開発における母集団薬物動態解析の実際

講師: 小松完爾 (帝人ファーマ株式会社)

3) Model-Based Drug Development の基礎および実例紹介

講師: 長谷川千尋 (小野薬品工業株式会社), 佐々木智啓 (日本ベーリンガーインゲルハイム株式会社)

指定討論者: 菅波秀規 (興和株式会社)

については、長期的展望に立って学会員への還元を講じるべきとの指摘があった。次回の理事会においても、決算と予算について継続審議することになった。

7. その他

・今後の理事会の予定

日時: 2014年3月28日(金)17:30~

場所: 東京理科大学

13日は、基本的な薬物動態解析法について講演がありました。ディスカッションでは、基本的な方法の中でも企業によって採用されている方法が異なることや異なる仮定に基づく方法があることが議論されました。14日はより高度な方法について講演があり、ディスカッションの中では、本セミナーの狙いの一つであった薬物動態解析専門家と生物統計専門家が用いる用語の乖離について議論がありました。議論の中では、クリアランスと分布容積について、薬物動態専門家は“薬物動態を表現する場合に、異なる事象を表しているため独立に考えるべきこと”という意味で独立という表現を用い、生物統計家は“モデルで同時表現されており、共分散も定義されているのにどうして独立なのか?”という具合です。その他にも線形性や定常状態についても議論がありました。その他にも non-linear mixed effect model を用いて PPK/PD 解析を行う場合に、設定されている仮定と仮定に対する感度分析の方法、モデルに対して要求される推定精度について議論がありました。Model Based Development が日本で発展するためには両者の協業が必要ですが、その第一歩として両者の交流ができた会でした。

6. シリーズ「計量生物学の未来に向けて」

6.1 科学, 社会, 教育, 未来

田中司朗 (京都大学大学院医学研究科)

象に初めて出会った6人の盲目の男の寓話をご存じでしょうか。6人が異なる場所を触ったため、壁, やり, 蛇, 木, 扇, ロープと、一頭の象が様々な認識を与えた、という話です。この落とし穴に入らないために統計学(多変量解析)が必要だ、というのが統計学の文脈におけるこの寓話の主旨です。私は最初、象は「多次元データ」の例え

だと理解しましたが、最近になって、この寓話をもっと一般的に解釈できるもので、象は「宇宙」と読み替えられるのではないかと思うようになりました。つまり、統計学は人間が宇宙を認識するための道具であり、社会はその役割を求めている、ということです。

薬剤疫学の例ですが、ここ数年バレニクリンと

いう禁煙補助剤の副作用が、欧米で社会問題になっています。発端は2011年6月で、心血管疾患のある患者においてバレニクリンが心筋梗塞を増やす可能性がある、という警告が米食品医薬品局から発行されました。これは承認申請時に提出されたランダム化臨床試験データから得られた知見ですが、心筋梗塞のリスクは極めて低いため、市販前のデータで検証的な解析結果を得ることは困難です。その後行われた22試験からなるメタアナリシスですら、イベント数は実薬群18/3801人、プラセボ群34/5431人に過ぎません。このように、市販前の安全性研究には限界がありますが、それを補う方法論として、データベースを用いた薬剤疫学研究が欧米で急速に発展しています。2013年には、ミニセンチネルプログラムという米食品医薬品局による市販後安全性監視事業により、100万人規模のレセプト・診療情報データベースを用いた解析結果が報告され（調整オッズ比1.02, 95%信頼区間0.71~1.47）、因果関係について否定的な見方が強まっています。この背景には疫学研究デザイン・因果推論・誤分類データ理論の発展があり、統計学により分からなかったことが分かるようになった、という例の一つといえます。

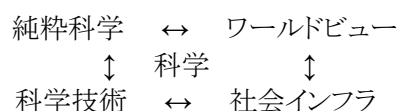
医薬品開発の領域では、2013年にもう一つ象徴的な出来事がありました。分子標的薬クリゾチニブが、非小細胞肺癌患者を対象としたランダム化臨床試験で極めて強い延命効果を示したにもかかわらず、費用対効果が十分でないことを根拠に英国で保険償還されなかったのです。日本でも中医協における費用対効果導入は既定路線のようです。ランダム化臨床試験は万能ではないということ、がん治療開発は個別化医療から別の方向に向かいつつあることを感じさせますし、統計学も急速な社会の変化に対応しなければなりません。

一方で、統計学の限界のため未だ真実が分からない、という例として、0~100mSV領域の低線量電離放射線による生物学的影響に閾値があるか、が挙げられます。これは特に震災後大きな関心を集めている社会問題ですが、学問的にはMullerによるショウジョウバエの突然変異の実験以来、線型閾値なし仮説が優勢です。広島・長崎の被ばく者コホート（寿命調査）でも、線量と発がんに関する解析では、線型閾値なし仮説に基づくPoisson回帰を用いられました（通常の対数線型モデルではなく線量とがん発生率が比例関係にあるというモデル）。ところが、回帰診断のためには様々な手法が提案されているものの、閾値があるかどうかを疫学データに基づいて判断する統計手法は確立していません。この問題は、統計学の文脈では変化点問題として調べられてきましたが、パラメータ空間が通常と異なる一種の特異モデルのため漸近理論がしばしば成り立たないことが

知られています。どのくらい高い線量から発がんリスクの有意な上昇が見られるか、に基づいて閾値の有無が議論されることがありますが、理論的にはあまり良い統計手法ではありません。

これらは、統計学が如何に科学的真実の探求に関わっているかを表す例ですが、ここで重要なキーワードが「社会」です。時宜を得たことに、面白い記事が2013年5月15日の朝日新聞に載りました。宇宙物理学者の佐藤文隆先生のインタビューで、ちょっと長いのですが科学と社会の関係を的確に表していますので紹介させていただきます。

「僕は、科学には四つの姿があると思う。まず、専門家の領域に属する二つ、基礎的な科学と、その成果を利用した実学的な科学。そして、一般人たちにとっても、この二つの科学に対応する形で、宇宙はどうなっているかといった世界観を与えるような科学、そして、たとえばスマホはどういう仕組みか、など日常的な領域での科学がある。



今とりわけ重要だと思うのは、一般の人たちにとっての二つの科学の中間に位置するもので、科学的考え方ででも呼ぶべきもの。つまり事実とそれに基づく論理で、これが他者とコミュニケーションするときの共通の基盤となる」

私の驚きは、宇宙物理学という純粋科学者が社会を視野に入れた科学観を強調していることでした。最近、佐藤文隆先生とお話しする機会がありましたが、科学的考え方の一つとして統計学が重要であるという認識をお持ちのようでした。翻って計量生物学の未来を考えると、学問としての計量生物学が、科学技術を経て、社会インフラになり、社会が宇宙を正しく認識するための道具の一つになる、という構図が目に見えます（宇宙物理学の泰斗を前に計量生物学を純粋科学と言い切るには勇気が要りますが）。

さて、計量生物学が社会インフラになる、とは具体的にどういったことでしょうか？いろいろな形があり得ますが、私は人が育つということに尽きるのではないかと思っています。医薬品開発に限れば、試験統計家という形で社会インフラになっているかもしれませんが、医学・生命科学一般ではそうではありません。ただ、他の学問分野に比べると、計量生物学は幸いキャリアパスに恵まれています。物理学には、いわゆるポストク問題があり、博士号を持つ優秀な学生が就職できない状況が続いています。私が京都大学の社会健康医学系専攻に異動して1年になりますが、元日本物理学会長の坂東昌子先生、日本物理学会キャリア支援センター長の栗本猛先生にお願いして、優秀

な学生を計量生物学へリクルートができないか、という取り組みを始めています。私自身教育経験

が浅く苦勞も多いのですが、未来に触れていることを実感しながら日々を送っています。

6.2 日本計量生物学会への期待

大学院を修了し、全く何も知らない放射線分野の分野に飛び込んで気が付いたら5年以上が経っておりました。就職してしばらくの間は新しいことを覚えるのに必死であり、計量生物の研究からはやや遠ざかっていたように思います。その間に日本の状況は大きく変わり、特に2011年3月11日の東日本大震災の後には放射線に関わる研究者の生活は急激に変化しました。特に震災の数日後から開始した一般市民の方々を対象とした電話相談に私も参加しましたが、放射線の知識は同じ職場の方々と比べ不足しており、満足な回答ができないことも多かったです。そんな中、たまに放射線疫学に関する質問が来るようになりました。私の直属の上司が放射線疫学の専門なのですが、たまたま上司が職場におらず私が代わりに電話に出ると、実際には疫学データの解釈についての質問であり、統計学に関連するものでした。計量生物学の研究をメインに行っていた大学院時代の知識をフルに動員し、その質問した方が満足される回答を返し、同じような疑問が出た際には私を指名して電話をしたいとまで言われた際には、普段はあまり意識しませんが、計量生物学が私の大事な柱であることを再認識しました。

計量生物学を軸としつつも、就職してからは様々な研究分野に踏み込みました。特に毎年の連合大会は6つの学会が共同で開催しているため、実に様々な研究発表が行われております。私も計算機寄りの発表を何度か行ったこともありました。また2012年4月より、米国のNational Cancer Institute (NCI)に在外研究員として1年間滞在しま

土居主尚（放射線医学総合研究所）

したが、その際には計量生物学の知識だけでなく、計算機寄りの知識やその研究が思いの外役に立ちました。一つのことを深めることも大事なものは当然ですが、色々な経験を積んでいると思いつけるところで役に立つことを身をもって経験いたしました。しかしながら、限られた時間の中で色々な研究分野に挑戦すると、どうしても一つの分野に費やせる時間は限られてきます。そのような時、私は各分野の専門家に助けられました。NCIに滞在中に参加させていただいた論文の書き方に関する講義で先生が言われたことが今でも印象に残っており、「論文を書くという作業は大変なものです。しかし我々は決して孤独ではない、大勢の協力者がいる」というような内容であったと思います。それは、論文を書くだけでなく、研究全体にもあてはまることだと思います。

自分自身が発表をするときも、そうでないときも連合大会には参加するようにしております。それは自分自身の研究のヒントとなるような発表を聞けるかもしれないという理由だけでなく、普段からお世話になっている共同研究者と議論ができたり、新しい共同研究に結び付いたりする可能性があるからです。また素晴らしい研究発表を聞くと、自分自身も頑張らねばとモチベーションが高められたりもします。私は、計量生物学会が引き続き幅広いバックグラウンドを持つ人にとって有意義な学会であり、なおかつ学会員同士の活発な交流の場であり続けることを期待いたします。

7. 2014 年度日本計量生物学会年会・学生会員発表者への旅費補助のお知らせ

大橋靖雄（日本計量生物学会会長）

和泉志津恵、菅波秀規、手良向聡、服部聡（企画担当理事）

2014 年度日本計量生物学会年会を2014年5月23日（金）午後および5月24日（土）に統計数理研究所にて開催します。また、5月23日午前同一会場にてチュートリアルの講演を実施します。年会の一般講演を募集しますので奮ってご参加下さい。一般講演申込は下記の年会案内をご参照下さい。

本年会は、応用統計学会の後援、統計数理研究所の共催にて実施され、両学会員は本年会、チュートリアル（日本計量生物学会と応用統計学会の

主催、統計数理研究所の共催）、並びに5月22日（木）開催の応用統計学会年会共に、会員価格で参加できます。本年会並びにチュートリアルの参加につきましては、原則として事前に参加申し込みをしていただきますよう、ご協力のほどお願いいたします。参加申込には、申込用紙（会員の皆様へ郵送いたします）、もしくは

HP : (<http://www.biometrics.gr.jp/>) をご覧下さい。

年会およびチュートリアルのお会場および参加要領

1. 会場

統計数理研究所 大会議室 (2 階)
<http://www.ism.ac.jp/>
〒190-8562 東京都立川市緑町 10-3
電話：050-5533-8500 (代)

2. 参加費

事前申込：

本学会員

年会 1,000 円, チュートリアル 2,500 円

応用統計学会員

年会 2,500 円, チュートリアル 2,500 円

非会員

年会 4,500 円, チュートリアル 4,500 円

学生 (会員, 非会員とも)

年会 1,000 円, チュートリアル 1,000 円

当日申込：

本学会員

年会 1,000 円, チュートリアル 3,000 円

応用統計学会員

年会 3,000 円, チュートリアル 3,000 円

非会員

年会 5,000 円, チュートリアル 5,000 円

学生 (会員, 非会員とも)

年会 1,000 円, チュートリアル 1,000 円

3. 参加申し込み期間

年会・チュートリアルは一括申込をお願いします
開始：4 月 1 日 (火), 締切：4 月 30 日 (水)

4. チュートリアル

2014 年 5 月 23 日 (金) 9:30~12:00 (予定)

テーマ：「ビッグデータと秘匿化の諸問題 (仮)」

講師：星野伸明 (金沢大学), 花岡悟一郎 (産業技術総合研究所), 佐藤慶浩 (日本ヒューレット・パッカー)

【趣旨】

ビッグデータの多くは何らかの形で業務上収集された情報であり、個人情報である。それらが、当初目的である業務以外に利用される際には、個人情報を保護する処理を行う必要がある。保護処理を行ったと思っていても、昨年起きた交通系 IC カードのデータ販売にまつわる騒動では、収集した側と収集された側の意識の違いや、データを分析する側と一般人との認識の違いが浮き彫りになった。そこで、本セミナーでは、データから個人が特定されることを防ぐ処理として施される「秘匿化」について、理論的問題、実務的問題に加え、社会的問題にも焦点をあてて、紹介

ならびに解説を行う。

5. 特別セッション

2014 年 5 月 24 日 (土) 午後 (予定)

「ゲノム情報学・農学・生態学における統計モデリング」

オーガナイザー・座長：三中信宏 (農業環境技術研究所)

【趣旨】

ゲノム情報のような分子データの急速な利用拡大は生物学の基礎分野だけでなく応用研究の風景を大きく塗り変えてきた。しかし、統計モデリング手法の進展は従来から用いられてきた形態・生態・行動データの新たな解析をも可能にしつつある。さらに、新旧のデータをまたいだ包括的な研究の萌芽も伸びつつある。2010 年度の計量生物学会大会ではシンポジウム (農学, 生態学, 進化学でのベイズ統計手法の応用に関する諸問題) を開催した。今回はベイズ統計学にとどまらず、広範なデータソースに基づく統計モデリングの方法論と実践的研究の蓄積、そしてそれらが示唆する統計的データ解析の理論への寄与について議論する場をつくることを目指す。

【演者・演題】 演題はいずれも仮題

- 1) 岩田洋佳 (東京大学・院・農学生命科学研究科)
「生物資源のゲノムワイド探索における統計モデリング」
- 2) 山村光司 (独立行政法人農業環境技術研究所)
「外来生物防除の植物検疫における統計分析について」
- 3) 高橋一男 (岡山大学・院・環境生命科学)
「生物形態と遺伝情報：ゲノム情報から見た生物多様性」
- 4) 粕谷英一 (九州大学・院・理・生物科学)
「生態・行動データの統計モデリングにおける問題点」
- 5) [コメンテーター] 島谷健一郎 (統計数理研究所)

6. 特別講演

2014 年 5 月 23 日 (金) 午後 (予定)

オーガナイザー：椿広計 (統計数理研究所)

【趣旨】

日本計量生物学会では、2012 年 5 月から「倫理綱領 (2008 年制定)」の改訂に取り組み、「統計家の行動基準」の策定を進めてきた。そして、現在社会的な問題となっているバルサルタンの臨床試験に関して、「臨床研究に関する日本計量生物学会声明」が公表された。本セッションでは、バルサルタンの臨床研究以前から「倫理綱領」の改訂に着手してきた背景を説明し、「統計家の行動基準」について、その作成過程、参考とした資料などを解説することにより、より深い理解と広ま

りを期待している。

【演者・演題】

椿広計（統計数理研究所）：「倫理綱領」改訂に至る背景（仮称）

佐藤恵子（京都大学）：「統計家の行動基準」について（仮称）

他1名：交渉中

7. 一般講演の申し込み

以下の分野毎に演題を募集します。

A. 臨床試験・臨床研究, B. 臨床診断学, C. 疫学, D. ゲノム・バイオインフォマティクス, E. 資源・環境・農業, F. 事例研究, G. その他

応募の際には、ご希望される分野名を必ずご指定下さい。分野毎の演題募集には、学会の独自性・特色をより打ち出し、専門性を深めるといふねらいがあります。分野毎に、より踏み込んだ活発な議論を期待しております。会員の皆様の積極的なご発表をお願い致します。

口頭での発表を希望するかポスターでの発表を希望するかを、申し込み時にお申し出ください。希望を最大限尊重いたしますが、プログラム編成の都合上、発表形式の変更をお願いする場合がございますことをご了承ください。

一般講演をされる学生会員の方に、50,000円を上限として旅費の援助をいたします。以下の(5)をご参照ください。

(1) 申し込み方法：

発表者氏名、所属（共同の場合は全員の氏名、所属）、講演題目、発表の形式（口頭、ポスター）、連絡先、学生会員は旅費の補助を希望するか否かを明記の上、電子メール、ファックスあるいは葉書で下記にお送り下さい。また、Biometric Bulletinへの掲載のためにお手数ですが、講演題目、発表者氏名、所属についての英語版も合わせてお送り下さい。

〒101-0051

東京都千代田区神田神保町 3-6

能楽書林ビル 5階

（財）統計情報研究開発センター内

日本計量生物学会事務局

E-mail : biometrics@sinfonica.or.jp

8. 2014年度統計関連学会連合大会のお知らせ

2014年度統計関連学会連合大会は2014年9月13日（土）から16日（火）まで東京大学本郷キャンパスにおいて開催されます（第一報：http://www.biometrics.gr.jp/news/all/firstinformation_20140109.pdf）。9月13日に、チュートリアルセ

Fax : 03-3234-7472

HP : <http://www.biometrics.gr.jp/>

(2) 発表申し込み受付開始 2014年3月1日（土）

(3) 発表申し込み締め切り 2014年3月31日（月）

(4) 予稿原稿締切（必着）2014年4月14日（月）
ご講演を申し込まれた方には予稿原稿執筆要領をお送りします。

(5) 学生会員に対する旅費の補助について

若い皆さんに積極的に研究発表の機会をもつていただくべく、本年会において演題発表を行う「学生会員」のみなさんに旅費の補助を行うことにしました。たくさんの学生会員のみなさんの発表をお待ちしています。

○ 対象者：本人が講演者となって一般講演セッションで演題発表を行う学生会員（口演、ポスターを問いません）

○ 補助額：一人あたり50,000円を上限として旅費を補助

○ 申込方法：補助を希望する対象者は年会の講演申込の際にあわせて「旅費等補助希望」と連絡してください。参加申込み・参加費支払いを各自で行っていただき、学会終了後、補助金額を本人に学会からお支払します。ただし申込多数の場合にはご希望にそえない場合があります。補助が決定した方には別途事務局より手続き方法について連絡します。

なお今回の補助は講演申込にあわせて日本計量生物学会に入会申込した学生さんにも適用されます。本年度は特別措置として学生会員の年会費は無料となりますので、周囲で日本計量生物学会に入会していない学生の方にもこの機会に是非入会と発表を勧めてください。

8. その他

(1) 年会期間中に日本計量生物学会総会及び学会賞授与式、並びに評議員会を開催します。

(2) 5月22日（木）には応用統計学会年会在本年会と同会場にて開催されます。参加費は正会員、後援学会員3,000円、非会員5,000円、学生（会員、非会員とも）1,000円です。

菅波秀規（連合大会プログラム委員）

セッションと市民講演会、9月14日から16日に、企画セッションなどの一般講演に加えてコンペティションなどを予定しています。土曜日からは始まるというやや変則的な日程ですが、まずは予定表に記載し、奮ってご参加願います。

9. 学会誌「計量生物学」への投稿のお誘い

松井茂之, 三中信宏 (編集担当理事)

本学会雑誌である「計量生物学」に会員からの積極的な投稿を期待しています。会員のためになる、会員相互間の研究交流をより一層促進するための雑誌をめざすため、以下の5種類の投稿原稿が設けてあります。

1. 原著 (Original Article)

計量生物学分野における諸問題を扱う上で創意工夫をこらし、理論上もしくは応用上価値ある内容を含むもの。

2. 総説 (Review)

あるテーマについて過去から最近までの研究状況を解説し、その現状、将来への課題、展望についてまとめたもの。

3. 研究速報 (Preliminary Report)

原著ほどまとまっていないがノートとして書き留め、新機軸の潜在的な可能性を宣言するもの。

4. コンサルタント・フォーラム (Consultant's Forum)

会員が現実に直面している具体的問題の解決法などに関する質問。編集委員会はこれを受けて、適切な回答例を提示、または討論を行う。なお、質問者(著者)名は掲載時には匿名も可とする。

5. 読者の声 (Letter to the Editor)

雑誌に掲載された記事などに関する質問、反論、意見。
論文投稿となると、「オリジナリティーが要求される」、「日常業務での統計ユーザーにとっては敷居が高い」などを理由に二の足を踏む会員が多い

かもしれませんが、上記の「研究速報」、「コンサルタント・フォーラム」は、そのような会員のために設けられた場であり、活発に利用されることを特に期待しています。いずれの投稿論文も和文・英文のどちらでも構いません。

2004年度から学会に3つの賞が設けられ、その一つである奨励賞は、「日本計量生物学会誌、Biometrics, JABES に掲載された論文の著者(単著でなくても第1著者かそれに準ずる者)で原則として40歳未満の本学会の正会員または学生会員を対象に、毎年1名以上に与えられる賞」です。最近、履歴書の賞罰欄に「なし」と書くと公募の際に引け目を感じるくらいです。ここ数年、「計量生物学」に掲載された論文が受賞しており、今後もこの傾向は続くものと見込まれます。特に、上記の条件を満たす方は、ご自身の研究成果の投稿先として「計量生物学」を積極的に検討されてはいかがでしょうか。

また、特に最近の計量生物学の研究に関しては、英語の総説はあっても、日本語で書かれたよい総説・解説が存在しない分野やテーマが多く見受けられます。日本語での総説論文は、多くの会員に有益な情報を提供すると同時に大変貴重なものになりますので、その投稿は大いに歓迎されます。これまで著者から論文掲載料をいただいていたが、学会員が筆頭著者の場合は無料とすることになりました。2013年発行の34巻1号からこれを適用しています。

なお、論文の投稿に際しては、論文の種類を問わず、雑誌「計量生物学」に記載されている投稿規程をご参照ください。会員諸氏の意欲的な論文投稿を心よりお待ちしております。

10. 編集後記

この2月には、全国的に大雪に見舞われました。月末を迎えても、九州の山々にはまだ雪が残っています。このような自然のもつパワーに触れると、あらためてリスク管理について考える機会に恵まれます。

リスク対策には、Avoidance(回避), Reduction(低減), Sharing(共用), Retention(受容)の4つの要素があるようです。単にリスクを回避や低減するだけでなく、リスクから生まれる損害を共用や許容

するということも含まれます。統計家が他分野の研究者たちと共同プロジェクトを遂行する場合、成果だけでなく、派生する損害を真摯に受け止める懐の深さも、研究者の素養として大切であると思います。

最後に、季節の変わり目には体調管理が難しくなるかもしれません。お体を大事にして、この年度末を乗り切りましょう。

(九州の由布岳より)

日本計量生物学会会報第114号
2014年2月28日発行

発行者: 日本計量生物学会
発行責任者: 大橋靖雄 編集者: 和泉志津恵, 寒水孝司